

# 『抱朴子』の歴史認識と王導の江東政策

渡邊 義浩

はじめに

西晋最末期に葛洪が著した『抱朴子』は、外篇卷五十自叙で自ら道家に分類する内篇と儒家に分類する外篇より成る。外篇は、<sup>(1)</sup> 隱逸の社会教化を論ずる卷一 嘉遯篇、隱逸が俗世間の濁りを清めることを説く卷二 逸民篇から始まる。しかし、隱逸の思想を全編にわたって展開することはなく、学問に努め儒教を尊重すべきことを説く卷三 勸學篇・卷四 崇教篇、君主権力の高さを量り知れぬと述べ、一人の臣が職務を兼ねることを警戒するなど『韓非子』にも似た思想を説く卷五 君道篇・卷六 臣節篇など、『隋書』經籍志が「雜家」に分類するほど、外篇五十卷は多様な内容を持つ。

そうした中で、外篇卷三十 鈞世篇は、葛洪の歴史認識を示したものとして注目に値する。また、外篇卷三十三 漢過篇と外篇卷三十四 吳失篇は、それぞれ後漢と孫吳の滅亡原因を論じたもので、葛洪が歴史認識を構築する際の分析対象になったものと考えてよい。

本稿は、『抱朴子』外篇に示された葛洪の歴史認識の特徴を王導の江東政策との関わりの中で論じ、葛洪が司馬睿政権に託した理想を探るものである。

### 一、葛洪と陸機

葛洪は、太康四（二八三）年、丹陽郡句容縣に生まれた。<sup>2</sup>祖父の葛系は、孫吳の大鴻臚に至ったが、孫皓に殺害される。父の葛悌も孫吳に仕えて會稽太守、五郡赴警大都督となるが、孫吳は滅亡した。その後、葛悌は西晉の吳地統治の方針に従って郎中に任ぜられ、累進して邵陵太守に至っている。したがって、葛洪は、旧孫吳系の臣下として、西晉に出仕する。西晉の貴族制下<sup>3</sup>では、寒門となる。

また、祖父の弟である葛玄は葛氏道の継承者である。『抱朴子』内篇卷四金丹篇によれば、左元放（左慈）―從祖仙公（葛玄）―鄭君（鄭隱）―葛洪という道流により、葛洪は仙道を受けた。<sup>4</sup>しかし、太安元（三〇二）年、鄭隱が入室の弟子を率いて霍山に投じた際、二十歳になっていた葛洪が、師に従って山に入ることはなかった。葛洪は、仙道を極めることを一度は躊躇っているのである。

翌太安二（三〇三）年、揚州に及んだ石冰の乱に対して、葛洪は義兵を挙げる。

太安中、石冰亂を作す。吳興太守の顧祕、義軍都督と爲り、周玘らと與に兵を起こして之を討つ。祕洪に檄して將兵都尉と爲す。水の別率を攻め、之を破り、伏波將軍に遷る。水平らくや、洪功賞を論ぜず、徑ちに洛陽に至り、異書を搜求して以て其の學を廣めんと欲す。<sup>5</sup>

「吳の四姓」<sup>6</sup>の一つ顧氏の出身である顧祕のもと、葛洪は石冰の乱の平定に努めた。その際に率いた兵力は、『抱朴子』外篇卷五十自叙によれば、「數百人を募り合」わせたという。葛氏の豪族としての勢力をここに見ることが出来る。

八王の乱に揺れる西晋は、こうした江東豪族の社会的規制力に大きな期待を寄せていた。八王の乱は、いわゆる「三王起義」より、外戚と諸王の抗争から、諸王の抗争の背後にある寒門と異民族の上昇運動へと、その性格を大きく変える。<sup>7</sup>旧孫吳出身のため、中原の貴族から蔑視されていた陸機は、永寧二（三〇二）年、成都王司馬穎のもとで「五等封建論」を著し、異姓の五等諸侯の封建により、国家権力の分権化を防ぐべきことを説いた。<sup>8</sup>そして、陸機とともに上洛していた顧榮たちが、中原の混乱を見捨てて江東に帰り、陸機にも呉に帰ることを勧める中、陸機は兵糧・人員の豊富な南土への成都王司馬穎の期待を背景に、後將軍・河北大都督に抜擢されて兵を委ねられる。中原貴族の孟超に、「貉奴能く督を作すや不や（貉奴能く作督不）」と罵られた陸機は、その兄である宦官の孟玖が、成都王司馬穎の寵愛を得ているために、自己の指揮下にある孟超を殺すことすらできなかった。孟超が軽兵で進み戦死すると、孟玖はその死を陸機のためと逆恨みし、成都王司馬穎に讒言した。長沙王司馬乂に七里澗の戦いで大敗した陸機は、太安二（三〇三）年、成都王司馬穎に誅殺される。君主に恵まれなかったための横死であった。

葛洪が、石冰の乱の平定後、論功行賞を待たずに洛陽に急いだ理由は、陸機の動向と関わる可能性がある。

稽君道二陸の優劣を問ふ。抱朴子曰く、「……陸平原子書を作りて未だ成らず。吾が門生、陸君の軍中に在り、常に左右に在りしもの有り。説くに、『陸君亡に臨みて曰く、「窮通は時なり。遭遇は命なり。古人立言を貴びて以て不朽と爲す。吾が作る所の子書、未だ成らず。此を以て恨と爲すのみ」と』と。余謂へらく、仲長統昌言を作りて、未だ竟はらずして亡くなる。後に董襲之を撰次す。桓譚の新論、未だ備はらずして終はる。班固

其の琴道を成すと謂ふ。今の才士何ぞ陸公の子書を賛成せざるや、と。<sup>10)</sup>

葛洪は、陸機の軍中に自らの門生を派遣し、陸機の臨終の言を伝え聞いている。そして、仲長統の『昌言』を董襲が、桓譚の『新論』を班固が完成させたように、陸機の未完の「子書」を続修する者がないことを嵇君道（嵇含、嵇康の兄喜の孫）に嘆いている。陸機の言の中にある「立言を貴びて以て不朽と爲す」は、『春秋左氏傳』に基づく立言不朽論で、曹丕の『典論』論文篇、曹植の「與楊徳祖書」に著された文學論の根底に置かれた思想である。<sup>11)</sup> 葛洪は、二人の文學論を継承しながら、陸機の「一家言の書」としての子書をまとめるべきことを力説している。『抱朴子』は、曹丕・曹植と陸機の「一家言の書」の重視を継承して著した、葛洪自らの子書なのである。<sup>12)</sup>

それと同時に、旧孫吳臣下であるが故に、中原貴族から蔑視され、君主の成都王司馬穎に誅殺された陸機の無念もまた伝え聞き、それを受け継ごうとしたことは間違いない。そうした思いは、『抱朴子』の中に多く指摘できる。<sup>13)</sup>

葛洪がまとめるべきとした陸機の著作の中には、そうした孫吳への蔑視を見返すことを目的とする著作がある。集大成として目指した『吳書』は完成しなかったものの、曹魏の基礎を築いた曹操の女々しさを描く「弔魏武帝文」、孫吳の滅亡理由を論ずる「辯亡論」はその代表である（注8所掲渡邊論文）。葛洪は『抱朴子』吳失篇で、「辯亡論」を踏まえ孫吳の滅亡理由を描く。その前提となっているものが、王充の影響を受けながらも独自の特徴を持つ「鈞世」の歴史観である。

## 二、鈞世篇と吳失篇

葛洪の歴史観を表現する外篇卷三十鈞世篇は、王充『論衡』齊世篇と深い関わりを持つ、とされている<sup>14</sup>。鈞世篇だけではない。『抱朴子』は、『論衡』に対する非難に応えて、これを弁護する卷四十三諭敵篇を備えるほか、自紀(『論衡』と自叙(『抱朴子』、以下同じ順序)、齊世篇と鈞世篇、對作篇と應嘲篇、問孔・非韓・刺孟篇に対して正郭・彈禰・詰鮑篇など、形式的にも『論衡』の影響を指摘できるほか、文章表現・内容さえも類似している。このため、『抱朴子』鈞世篇と『論衡』齊世篇に表現される反尚古主義を比較した大淵忍爾は、葛洪のそれは王充ほど徹底したものでなく、主として子書の価値の主張という限定された面での反尚古主義であって、一般論にまで拡大されるものではない。その論理は『論衡』からの借物であった、とその歴史観を独自のものと考えない。しかし、『抱朴子』鈞世篇と『論衡』齊世篇は、著者の生きた時代に対する認識が大きく異なる。

『論衡』齊世篇は、講瑞・指瑞・是應・治期・齊世・宣漢・恢國・驗符・須頌の九篇よりなる「頌漢論」の一部を占める。その歴史認識は、堯・舜の御世と自らが生きる後漢の章帝期を等価値とするために用いられる。

王充の『論衡』齊世篇は、「上世」「下世」という時代の違いにより、人に美醜があり、寿夭に差があることを「此の言、妄なり」と批判することから始まる。「上世」「下世」の価値が等しい理由は、ともに統治する者が「聖人」であることに求められる。そして、聖人の徳は、「天」と「氣」が時代により変わらないために等しく、その結果、「帝王の治政」は、「百代道を同じくする」というのである。こうして「上世」の帝王である堯・舜と、「下世」(現世)

の帝王である章帝の価値は等置される。

それでは、なぜ人々は、等価値であるはずの「上世」の聖王を優れたものと誤解するのか。王充は、その理由を「經傳」が上世の「賢聖の美を増」していることに求める。そして、『論語』子張篇第十九で、子貢が「紂王」の悪をそれほどではなかった、と言っていることを論拠に、紂の悪がそれほどでないならば、常に紂と対極に置かれる「堯・舜」の善もそれほどではない、と上世の聖王を相対化する。しかも、『論語』では子貢となつてゐる発言者を孔子に改め、その權威により、漢の帝王と堯・舜の徳を並置するのである。このように、王充の『論衡』齊世篇は、漢を称えるために、堯・舜の価値をも低くする頌漢の立場から、古今の世の等価値を主張するものであった。<sup>16)</sup>

これを承けて、『抱朴子』鈞世篇も、堯・舜などの聖帝の御世を特別な価値を持つとは考えない。したがって、古の書もその価値は、それほどのもではない。

或<sup>あると</sup>曰く、「古の書を著す者は、才大いにして思ひ深し。……」と。古書の隠れたる多きは、未だ必ずしも昔人の故<sup>よから</sup>に曉らかにし難きを欲せしにあらず。或いは世異なりて語變り、或いは方言同じからず。荒を経て亂を歴し、埋藏<sup>くま</sup>久しきを積み、簡編の朽絶し、亡失する者多し。或いは雜續・殘缺し、或いは章句を脱去す。是を以て知り難くして、至深の若きに似たるのみ。<sup>17)</sup>

「古の書」(古典)が深遠に見える理由は、言葉が変わり、方言が異なることに加えて、「埋藏久しきを積み、簡編の朽絶し、亡失する者多」いためである。こうした残存状態からの經書への資料批判は『論衡』にはなく、「汲冢書」が発見された東晉の時代性を反映している。<sup>18)</sup> もちろん古典の相対化は、王充にも見られる。しかし、王充は古典の相対化から頌漢へと論を進める。これに対して、『抱朴子』は、西晉の贊美へと向かうことはない。

且つ夫の尚書なる者は、政事の集なり。然れども未だ近代の優文・詔策・軍書・奏議の清富・瞻麗なるに若かさるなり。毛詩なる者は、華彩の辭なり。然れども上林・羽獵・二京・三都の汪濊・博富なるに及ばざるなり。然らば則ち古の子書、能く今の作に勝る者は何ぞや。……。且つ夫の古なる者、事に醇素なるも、今則ち彫飾せざる莫し。時の移り世の改むるは、理の自然なり。……世人皆之が曩より快きを知る。何を以て獨り文章のみ、古に及ばざるや。<sup>19)</sup>

『尚書』批判は『論衡』にも見られるが、それを展開して王充が漢を賛美したように、葛洪が西晉を賛美することはない。また、『尚書』を現代の「詔策」、「毛詩」を現代の賦よりも及ばないとする葛洪は、それでも「古の子書」だけは高く評価する。前述したように、「子書」（一家言の書）の重視は、曹丕・曹植の文學論の継承である。

このように『抱朴子』鈞世篇に見られる、古と今とを等価値とする「鈞世」の歴史意識は、西晉の正統化に用いられなかった。その理由は、孫吳の滅亡を論じた吳失篇の検討により明らかとなる。

吳失篇は、陸機の「辯亡論」の影響を受けている。陸機は、孫吳の滅亡理由を西晉の天威、あるいは孫吳の天命が尽きたことには求めない。<sup>20)</sup> また、父の陸抗や陸凱が輔弼している間は、「元首」が病んでいても「股肱」が優れているため、滅亡の兆しはなかった、とする。ところが、股肱の臣が亡くなると、十二日間と持たずに孫吳は崩壊する。曹魏や蜀漢の進攻を阻んだ「險阻の利」が変わったわけではない。滅亡の原因は、君主による「授任の才」が異なったことによる、とするのである（注8所掲渡邊論文）。

原因を人事に一元化する陸機に比べると、『抱朴子』吳失篇が記す孫吳の滅亡原因は、複合的であり、かつ西晉末の時代状況がそこに反映している。

吳の杪季、代を殊にするも疾を同じくすること前の如し。之を彼に失ふも、弦を此に改むる能はず。……余の師たる鄭君、具に親悉する所、毎に之を誨へて云ふ、「吳の晩世、尤も劇しきの病は、賢者用ひられず、滓穢序に充ち、紀綱弛紊し、吞舟も多く漏る。貢舉は貨に厚き者を以て前に在らしめ、官人は黨の強き者を以て右と爲す。……公に背くの俗は彌々劇しく、正直の道は遂に壞れぬ。是に於て、斥鷃も驚風に因りて以て霄を凌ぎ、朽舟も迅波に託して電のごとく邁み、鸞鳳も六翮を叢棘に卷き、鷁首も潢汙に滯りて權がれず。秉維の佐・牧民の吏は、母後の親に非ざれば、則ち阿諂の人なり。……」<sup>(41)</sup>と。

葛洪は、孫吳末は時代を異にするものの、「前の如し」(後漢末と同じ)であったという歴史認識を示す。古は必ずしも優れていない。「鈞世」の歴史観は、著作に止まらず、国家の認識にも用いられている。師の鄭君(鄭隱)によれば、孫吳の末期は、賢者は用いられず、綱紀は紊乱し、察舉は賄賂にまみれ、官位は党勢に拠り、さらに外戚と阿諛追従の徒が輔弼の官も牧民官も独占するものであった、という。しかし、孫皓のとき、外戚が権力を掌握したという事実はない。<sup>(42)</sup>「母後の親」「阿諂の人」が政権を壟断したのは、まさに亡びようとしている西晋の八王の乱前後、具体的には外戚の楊皇后や寒門の孫秀らが権力を掌握したときのことであった(注7所掲渡邊論文)。すなわち、『抱朴子』吳失篇の孫吳滅亡の時代認識は、西晋末期の現実を投影しているのである。

鄭君又稱すらく、「其の師たる左先生、……其の門生に告げて曰く、『漢必ず耀きを寢め、黃精すなは載ち起り、樞紐を太微に續ぎ、紫蓋を鶉首より迴らし、天に聯なり物を理め、東夏に光宅し、惠風區外に被り、玄澤宇内に洽く、重譯武あしあを接し、貢楛庭に盈ち、蕩蕩・巍巍として、上下に格り、平を承け文を守り、因循すること甚だ易し。而るに五弦響きを謚め、南風詠はざるは、……用ひる者賢ならず、賢なる者用ひざればなり。……已



みなん、悲しきかな。我の生れるや辰ならずして、先ならず後ならざるを。將に吳土の化して晉域と爲り、南民の變じて北隸と成るを見んとす』と。言猶ほ耳に在りて、孫氏興櫬す』と。

鄭君の師である左慈の予言によれば、「紫蓋」（天子の位）は「鶉首」（長安）から「東夏」（江東）へと移る天命のはずであった。しかし、孫吳が西晉の領域となり、「南民」が「北隸」（北の奴隸）になるのを見ることが悲しい、という左慈の言葉が耳に残るうちに孫皓は降服した。賢者が用いられなかったからである。

複合的な孫吳の滅亡原因を挙げながら、葛洪は、賢者が用いられなかったことを最も重視する。それは、西晉末において賢者が用いられていない現状を反映している。したがって、『抱朴子』吳失篇は、近い将来のために著された。

抱朴子之を聞きて曰く、「二君の言は、來戒と爲す可し。故に篇に録す。後代の有吳の國を失ふは、天より降るに匪ずと知らんことを欲するなり。若し苟も國惡を諱み、織芥をも貶ぜざれば、則ち董狐も直筆に貴ばるること無く、賈誼も將に譏りを過秦に受けんとするか」と。

葛洪は、「二君」（左慈・鄭隱）の言葉を「來戒」（将来の戒め）とするために、吳失篇を記録した。その著作意図は、孫吳の滅亡が天命にはよらず、賢者が用いられないためであったことを「後代」に知らしめることにある。「鈞世」の歴史観が西晉贊美に向かわなかった理由である。

『抱朴子』吳失篇の主張は、陸機の「辯亡論」と同じ賢者の登用である。ただし、陸機の「辯亡論」は、西晉惠帝の暗愚を風刺するものであった。これに対して、『抱朴子』吳失篇は、「存問風俗」「以招俊乂」という江東政策を掲げる王導―司馬睿政権への提言の前提となる時代認識となっている。

### 三、王導の江東政策と漢過篇

建武元（三〇四）年、成都王司馬穎の討伐に參戰して敗れた琅邪王司馬睿は、封地の琅邪國に戻っていた。永嘉元（三〇七）年、東海王司馬越が成都王司馬穎を殺害すると、琅邪王司馬睿は安東將軍・都督揚州諸軍事に任ぜられる。琅邪國出身の王導は、朝廷の衰退を予測し、建業に赴く<sup>26</sup>。王導は、琅邪王司馬睿に、揚州を安定的に治めるため、江東豪族を厚遇することを勧める。

（王）導因りて計を進めて曰く、「古の王者、故老に賓禮し、風俗を存問し、已を虚くし心を傾けて、以て俊父を招かざるは莫し。況んや天下喪亂して、九州分裂し、大業草創して、人を得ること急なる者をや。顧榮・賀循は、此の土の望なれば、未だ之を引きて以て人心を結ぶに若かず。二子既に至らば、則ち來らざるもの無し」と。帝乃ち導をして躬ら循・榮の二人に造らしめ、皆命に應じて至る。由れ是り吳・會風靡し、百姓心を歸す。此れよりの後、漸く相崇奉し、君臣の禮始めて定まる<sup>27</sup>。

王導は、江東人士の登用方針として、ここで「存問風俗」「以招俊父」を挙げている。葛洪が各篇ごとに長短の差や精粗のばらつきが目立つ『抱朴子』をあえて公開した理由には、この政策との関わりが考えられる。

前者の「存問風俗」について、葛洪は「文」と「風俗」との関係を次のように述べる。

文は豐贍を貴ぶ。何ぞ必ずしも善と稱すること一口の如くならんや。風俗の流遯、世塗の凌夷を拯ひ、疑者の路を通じ、貧者の乏を賑する能はざれば、何ぞ春華の肴糧の用を爲さず、菑蕙の氷寒の急なるを救はざるに異なら

んや。古の詩は過失を刺す、故に益有りて貴し。今の詩は虚譽に純らなり、故に損有りて賤しきなり。<sup>(29)</sup>

「流遯」は、『淮南子』本經訓に、「凡そ亂の由りて生ずる所の者は、皆流遁に在り（凡亂之所由生者、皆在流遁）」とあるように、亂の原因となる風俗の亂れのことである。「古の詩」（『詩經』）が世の「過失」を風刺するため尊貴であるように、「文」も風俗の亂れを指摘することで貴い、という。

したがって、『抱朴子』は、孫吳の滅亡以来、江東の風俗が悪化していることを指摘する。西晉が江東の「風俗」を無視した支配を行い、吳姓もそれに迎合しているためである。

上國の衆事、江表に勝れる所以の者多し。然れども亦た否む可き者有り。君子禮を行ひ、俗を變へるを求めずとは、本邦を違りて他國に之き、其の桑梓の法を改めざるを謂ふなり。<sup>(30)</sup>

波線部に『禮記』曲禮篇下を引用して、西晉が「江表」（江東）を支配する際に、その風俗を変えるべきではない、と主張する葛洪は、この文の後、「聲音」を「北語」にしたもの、「中國の哭」を学ぶもの、「石散を服」用するもの、「喪位」に居ないものの事例を列挙し、江東の人々が中原の惡風（後者三例）に擦り寄っていることを批判する。

このほか、花嫁をなぶる風習を批判する外篇卷二十五疾謬篇など、江東の風俗の「過失」を批判する記述は、他にも見られる。さらに、後漢や孫吳、そして西晉の風俗を批判する文章も多く、『抱朴子』が「存問風俗」という王導の求めに応ずるためにまとめられた著作である、と捉えるのに十分な風俗への批判を備えている。

後者の「以招俊乂」の「俊乂」とは、『尚書』皋陶謨篇に、「九德咸事、俊乂在官」とある、禹が皋陶の示す九徳を備えることで、在野の賢人を用いて官に就けた故事を踏まえる言葉である。

漢魏革命を堯舜革命に準えた曹魏から禪讓を受けた西晉は、自らの革命を舜禹革命に準えている。<sup>(31)</sup> その禹が世に隠

れた賢人を求める「俊父」の故事は、西晉の帝室を嗣ごうとする司馬睿に求めるに相応しい。しかも、それは、曹魏に前例がある。

正始二年、太僕の陶丘一・永寧衛尉の孟觀・侍中の孫邕・中書侍郎の王基、(管)寧を薦めて曰く、「臣聞くならく、龍鳳は隱耀し、徳に應じて臻り、明哲は潛遁し、時を俟ちて動く。是を以て鸞鷲岐に鳴くや、周道隆興し、四皓佐と爲るや、漢帝用て康し。伏して見るに、太中大夫の管寧、二儀の中和に應じ、九徳の純懿を總べ、章を素質に含み、冰潔にして淵清、玄虚にして澹泊、道と與に逍遙す。心を黄老に娛しませ、志を六藝に游ばせ、堂に升起室に入り、其の鬪槩を究む。古今を胸懷に韜み、道德の機要を包む。中平の際、黄巾陸梁し、華夏傾蕩して、王綱弛頓す。遂に時難を避け、桴に乗り海を越へ、遼東に羈旅すること、三十餘年。乾姤に之くに在り、景を匿し光を藏し、嘉遁して浩を養ひ、儒墨を韜韞し、潛化傍流して、殊俗を暢ばす。黄初四年、高祖文帝、羣公に疇諮し、俊父を求めんことを思ふ。故の司徒たる華歆、寧を舉げ選に應じ、公車もて特に徴するに、遐裔より振翼して、翻然として來翔す。……若し二祖の招賢の故典を繼ぎ、僞邁を賓禮して、以て緝熙を廣むれば、濟濟の化、前代に侔しらん。……」と。

曹魏の三代皇帝曹芳(齊王)のとき、太僕の陶丘一たちは、「嘉遁」(良き隱遁)をしていた管寧を「九徳」を備えるために拔擢することを勧めている。管寧は、かつて文帝曹丕・明帝曹叡の「二祖」から、「招賢」のため「賓禮」を尽くされた「僞邁」あるいは「俊父」であった。

「九徳」「俊父」という言葉から、この上奏文が先に掲げた『尚書』皋陶謨篇を踏まえていることは明らかである。しかも、そこに「賓禮」が加わっていることを鑑みれば、先に掲げた王導の江東統治の基本方針もまた、これらを踏

またた発言であることを理解できよう。そして、『抱朴子』の外篇卷一が「嘉遁」篇であること、『抱朴子』において葛洪が、「老莊」を批判する一方で「黃老」を尊重し、「六藝」に通ずべしと強く主張することも、ここに描かれた管寧の「嘉遁」の具体像と合致する。

『抱朴子』への引用事例より『三国志』を読んでいたことが分かる葛洪は、この故事を踏まえて、王導の基本方針を理解し、それに応えるために、「嘉遁」篇卷一を外篇の筆頭としたと考えてよい。葛洪は、『詩經』を典拠とする「存問風俗」、「尚書」を典拠とする「以招俊乂」という王導の二つの政策に応えるために、『抱朴子』を著したのである。<sup>33</sup>これにより、葛洪はそれなりの地位を司馬睿政権で得ることになる。建興元（三一三）年、丞相となった司馬睿に辟召されて、丞相掾（百六掾の一人）となっていた葛洪は、建武元（三一七）年、三十五歳で『抱朴子』を完成すると、石冰の乱を討伐した旧功を理由として關中侯に封建され、句容の邑二百戸を食むことができた。

葛洪は、石冰の乱を討伐し得る豪族としての実力と、葛氏道の一族としての社会的規制力に加えて、『抱朴子』を司馬睿政権に評価されたのである。ただし、葛洪が『抱朴子』を公開したのは、自らが用いられようとする利己心だけが理由ではない。『尚書』の説くように、「嘉遁」の「俊乂」を「賓禮」すれば、君主に「九德」が備わって、国運は恢復する。そして、それが実現すれば、王導―司馬睿政権は、堯・舜・禹といった聖帝の御世にも劣らない治世をもたらし得る、と考える「鈞世」の歴史観を背景に、葛洪は司馬睿政権に自らの理想を託したのである。その理想とは何か。理想を抱くに至った、理想とは異なる現実社会を反映する歴史認識を漢過篇から考えてみよう。

前載を歴覽して、近代に逮ぶに、道の微かに俗の弊れたるは、漢末より劇<sup>はげ</sup>しきは莫<sup>な</sup>きなり。<sup>35</sup>

葛洪は、「鈞世」の歴史観に基づき、過去を均<sup>な</sup>した中でも、最も悪い時代を後漢末とする。<sup>36</sup>その理由として、『抱朴

子』外篇卷三十三 漢過篇は、歪んだ人物評価の具体例を二十二例も列挙する。後漢末を最悪の時代とする理由は、人物評価の歪みに求められているのである。しかし、それが後漢への歴史認識として示されながらも、現実には西晋末の現実社会に対する批判であることは、次の記述より理解できる。

而るに漢の末葉、桓・靈の世、柄は帝室を去り、政は姦臣に在り。……故に東園に賣官の錢を積み、崔烈に銅臭の唾有り。上爲せば下倣らひ、君行はば臣甚だし。……中正・吏部、並びに魁儻と爲り、各々其の估を責む。清貧の士、何の理ありて望み有らん。<sup>37)</sup>

批判の対象は、後漢末の桓帝・靈帝の治世であるが、「中正」は曹魏で初めて置かれた官で、「吏部」尚書が人事権を管掌するのも曹魏以降のことである。後漢末に仮託して、葛洪が西晋の九品中正制度を批判していることは明らかである。『抱朴子』の漢過篇に展開される後漢末の人物評価への批判は、清談により察舉が崩壊する中で衰退した西晋末期への批判であった。<sup>38)</sup> 古と今とを等価値とする歴史観を共有しながらも、王充が後漢を賛美したように、葛洪が西晋を賛美しない理由はここにある。

九品中正制度のもと、人物評価を掌る中正官は、不正を極めていたと葛洪は主張する。

郷論を持つ者は、則ち選舉を賣りて以て謝を取り、威勢有る者は、則ち符疏を解きて以て財を索む。或いは罪人の賂を受け、或いは有理の家を枉す……<sup>39)</sup>

「郷論を持つ」中正官は、「選舉」（察舉）を財力で歪めている。したがって、有力な家は、ひたすら財産を求める。察舉の腐敗が、社会を疲弊させているのである。それだけではない。こうした察舉を背景に、名声を得たい人々は、奇矯で突飛な行動や無礼を行い、表面的に戴良や阮籍を慕って放達を繰り返す。

世貴の門に生まれ、熱烈の勢に居れば、率ね多く驕と期せざるに、而るに驕自づから來たる。……夫の偉人・巨器の若きは、量逸韻遠、高蹈獨往にして、蕭然として自得す。……世人は戴叔鸞・阮嗣宗の傲俗・自放を聞き、大度と謂はるるを見て、其の材力の傲生の匹に非ざるを量らず、而るに慕ひて之を學ぶ。或いは項を亂し頭を科にし、或いは裸袒し蹲夷し、或いは脚を稠衆に濯ひ、或いは便を人前に洩し、或いは客を停めて獨り食らひ、或いは酒を行して親しき所に止む。此れ蓋し左衽の所爲にして、諸夏の快事に非ざるなり。……今世人戴・阮の自然無く、而るに其の倨慢に效ふ。<sup>(40)</sup>

名声を得るために突飛な行動を取る理由は、「世貴の門」「熱烈の勢」と表現される貴族たちが驕慢で、戴良（後漢末の逸民）や阮籍のような礼を外れた行いをしていいるためである。しかし、表面的に戴良・阮籍を模倣する行為に「自然」はない。そうした、名声を得るための奇矯な行動は、葛洪が尊敬する陸機も批判していたといふ。<sup>(41)</sup>

『抱朴子』正郭篇は、後漢末の人物評価の歪みを齎した者として郭泰を厳しく批判するが、そこに示される不満も西晋末期の察挙に対する葛洪の、さらには江東全体の不満の仮託と考えてよい。中原出身の替合が高く評価し、「亞聖」と呼ぶ者もいる郭泰を批判する論拠は、いずれも江東出身者の議論に求められる。<sup>(42)</sup>

外篇卷四十六 正郭篇は、第一に諸葛元遜の郭泰批判を継承して、郭泰が本質を見抜けないことを批判し、第二に殷伯緒の批評を継承して、郭泰が朝廷で行うべき人物評価を民間で勝手に行ったことを批判し、第三に周昭の議論を継承して、郭泰が国家有用の人物を推薦しない「亂を避ける徒」であり、高潔な隱逸ではない、と批判する。吉川忠夫は、葛洪の郭泰攻撃は、ただ一郭泰に対する攻撃ではなく、魏晉貴族の生活、ひいては魏晉貴族社会のなりたちそのものに対する攻撃であった、とする。『後漢書』を著した劉宋の范曄が、自分たちの貴族制の淵源として郭泰や黨



人を高く評価することとは、対照的な評価と言えよう。

『抱朴子』は、郭泰らによる後漢末の人物評価を単に批判するだけではない。それへの対案として、外篇卷二十二行品篇では、三十九種の人物評価の具体例を掲げる。それは、「聖人」「賢人」の次に「道人」を挙げ、その下に「仁人」を位置づけるなど、「道家」を尊重する独自の基準となっている。

さらに、あるべき察舉を王導の「以招俊乂」に呼応しながら、次のように述べている。

故に聖君は心を招賢に根づかせ、才を擧ぐるを以て首務と爲さざるは莫く、玉帛を丘園に施し、翹車を巖藪に馳せ、人を求むるに勞しめ、能を用ふるに逸らざり、上は槐棘より、降りて阜隸に逮ぶまで、道を論じ國を經するに、職に任ぜざるは莫し。己を恭しき無爲にして、治平かに刑措み、化洽なくして外無く、萬邦咸寧んず。<sup>(14)</sup>

ここで主張される「無爲の治」は、何晏が『論語集解』で示した人を抜擢する「舜の無爲の治」を踏まえており、葛洪は、それを招賢思想に基づき隱逸を抜擢するものと捉えた。そして、葛洪をはじめ、神仙に次ぐ隱逸として生きる者は、理想の君主の「無爲の治」の招賢に應えるため、自らの存在を著作により表現する必要があると考え、『抱朴子』を著したのである（注12所掲渡邊論文）。さらに、葛洪は、王導―司馬睿政權に対して、招賢のため察舉の提言を試みる。

#### 四、察舉への提言

葛洪は、あるべき吳姓と望むべき晉朝を次のように提言する。



今普天統を一にし、九域風を同じくすれば、王制・政令は、誠に宜しく齊一なるべし。……昔吳土初めて附するや、其の貢士偃せられて以て試せられず。今太平なること已に四十年に近きも、猶ほ復た試せられざるは、東南の儒業をして在昔より衰へしむる所以なり。此れ乃ち左衽の類に同じくせられ、之を別つ所以に非ざるなり。……今若し遐邇一例に、明考・課試すれば、則ち必ず筈を千里より負ひて、以て師友を尋ね、其の禮賂の費を轉じて、以て記籍を買ふ者多きこと、日を終ふるを俟たざらん<sup>(45)</sup>。

西晋によつて三國が統一されたあと、「王制・政令」は「齊一」ではなく、孫皓が降伏してから、「其の貢士」は「格かれ以て試せられず」、「今太平なること已に四十年に近きも、猶ほ復た試せられざる」ことが、「東南の儒業をして在昔より衰へしむる所以」となっている。これが葛洪の認識する、望ましからざる晋朝と吳姓の現在までの関係である。葛洪が王導―司馬睿政権に期待することは、「遐邇一例に、明考・課試」すること、すなわち、中原と江東とを同じ扱いで試験を行うことである<sup>(46)</sup>。それは、一時的に荒廢していた「東南の儒業」を復興させる政策ともなる。王導―司馬睿政権に期待する統一的な察舉とは、具体的には次のようなものである。

又秀・孝は皆宜しく舊の如く經を試み策を答へしめ、其の置對の姦を防ぐべし。當に必ず其の中らざる者を絶ちて吏に署すること勿く、罰を加へて禁錮せしむべし。其の擧ぐる所、書の中らざる者は、刺史・太守は免官す。中らざるを左遷すれば、中る者は多く、中らざる者は少く、後轉た過故を得ざらん。若し昧を受けて當たらざる所を擧げ、發覺して驗有る者は除名し、禁錮すること終身、赦令を以ても原さず<sup>(47)</sup>、擧げらるる所と擧ぐる者は罪を同じくせん<sup>(47)</sup>。

孝廉・秀才は、「舊」(旧制)<sup>(48)</sup>のように「經を試み策に答」えさせる制度に戻し、推薦した者が合格しなかつた場合、

推薦した「刺史や太守」に連座制を適用して「免官」すべきである、と葛洪は主張する。推薦者の連座は、唐の貞観年間（六二七年～六四九年）に、秀才科に採用されたことで著名な制度である。

それは、理想の君主が「無爲の治」を実現するには、招賢思想に基づき隱逸を拔擢する必要があるためであった。王導の求める「以招俊乂」という方針に依じて、江東の賢人が察挙に応じ、司馬睿が禹の「九德」を備えれば聖王の御世が実現する。それが、葛洪の「鈞世」の歴史観から導かれる主張であった。葛洪は、理念的に招賢思想を述べ立てるのではなく、後漢末を最悪と見る歴史認識から、王導―司馬睿政権が取るべき江東支配の道を指し示したのである。

こうした葛洪の提案に対して、司馬睿政権も無反応であったわけではない。

是れより先、兵亂の後なるを以て、務めて慰悦を存し、遠方の秀・孝到れば、策試せず、普ねく皆除署す。是れに至りて、(二元) 帝舊制を申明し、皆經を試ましむ。科に中らざるもの有らば、刺史・太守をば免官す。太興三年、秀・孝多く敢へて行かず、其の到る者有らば、並びに疾に託す。<sup>(49)</sup>

元帝司馬睿は「舊制」を復活して、試験を行い、不合格の場合には、刺史・太守を免官にした。その結果、太興三(三二九)年、秀才・孝廉は行われず、来た者はみな病氣と称した、という。このうち、元帝は、やむなく七年間の期限付きで、試験の廃止に踏み切るが、秀才の試験を廃止しなかったため、京師に出かけた者は、丹陽出身の湘州刺史である甘卓が推挙した桂陽の谷儉ひとりであった(『晉書』卷七十 甘卓傳)。推挙者も被推挙者いずれもが、江東出身者である。江東が、九品中正以外の登用制度である秀才・孝廉を重視したことを理解できよう。<sup>(50)</sup>

このように葛洪の提言は一時的に受け入れられ、東晉は考試を復活させたが、やがて衰退する。考試はあくまでも、

九品中正制度と並行して実施されており、秀才・孝廉の出身者が高位に出世することは、事実上、不可能であったためである<sup>(41)</sup>。しかし、葛洪の提言は、貴族制に依拠する門閥主義への対抗となる、賢才主義の主張の先駆となる。やがて賢才主義は、寒門の生き方の基本となると共に、梁の武帝の貴族制改革の原動力となっていく。

一方、懸命に学問を修め、それを察舉に結びつけようとする葛洪の姿勢は、後世の寒門の典型であり、それは顔子推などに受け継がれて、貴族制のそもそもの存立基盤が学問に代表される文化的卓越性にあった<sup>(42)</sup>、と回顧されていくのである。

#### おわりに

江東の寒門に生まれた葛洪は、君主に恵まれず八王の乱で横死した陸機の軍中に門人を派遣し、その臨終の言葉を伝え聞くほど、陸機に傾倒していた。このため、陸機が孫呉の滅亡を描いた「辯亡論」を承け、葛洪は『抱朴子』呉失篇で孫呉の滅亡を論ずる。

その際、前提となった歴史認識が、古と今とを等価値と考える「鈞世」である。これは、王充の『論衡』齊世篇の影響を受けているが、頌漢のために「齊世」を設定する王充に対して、葛洪の「鈞世」は、西晋の賛美へと向かわなかった。

むしろ、呉失篇には、混乱する西晋への危機意識が反映していた。葛洪が最も憂慮したことは、孫呉の滅亡原因としても強調する、賢者を用いない君主のあり方である。陸機の「辯亡論」も同じく賢者を用いなかったことを批判す

るが、それは西晉惠帝の暗愚を風刺するものであった。これに対して、葛洪のそれは、「存問風俗」「以招俊乂」という江東政策を掲げる王導―司馬睿政権への提言の前提となる時代認識である。

『抱朴子』は、「存問風俗」に対しては、西晉の支配により江東の「風俗」が悪化したことを批判的に論じ、「以招俊乂」に対しては、後漢末の歴史認識を通じて西晉末の察舉のあり方を批判した。後漢末は、西晉末と同様、人物評価の歪みにより察舉が崩壊していたのである。『抱朴子』は、王導―司馬睿政権に具体的な察舉の改革案を提示する。

それは、古と今とを等価値とする「鈞世」の歴史認識に基づき、戦勝国の末裔が住む中原と、亡国の旧民が住む江東を差別せず、推薦者の罰則規定を含めて、經學の試験により孝廉・秀才を運用することであった。西晉において高官を輩出する制度的保証となっていた九品中正制度を直接改変する提案ではないところに、寒門の江東豪族出身の葛洪の限界と切実さを見ることが出来る。

司馬睿が建国する東晉では、葛洪の期待は実現せず、九品中正制度を中心とする官僚登用制度が続いて、貴族制は再生産された。そうした状況の中で、寒門として差別された葛洪以外の江東豪族が、いかなる思想や行動を展開していくのかについては、稿を改めて論ずることにしたい。

- 1 日本における『抱朴子』研究については、平木康平『『抱朴子』の世界』（講座 道教 第一巻 道教の神々と經典）（雄山閣出版、一九九九年）を参照。内篇と外篇の関係について、重沢俊郎「抱朴子に於ける統一の理念」（『東洋の文化と社会』一、一九五〇年）は、仙家・道家・儒家の三者を併存ではなく、高次に統一する立場に立つものと位置づける。なお、『抱朴子』は、楊明照『抱朴子外篇校箋』（中華書局、一九九一年）、王明『抱朴子内篇校釈』（中華書局、一九八五年）を底本とした。

- 2 葛洪の伝記については、『晉書』卷七十二「葛洪傳」、『雲笈七籤』卷三所収『靈寶略記』などから、その生涯を描いた大淵忍爾「葛洪伝考―晉朝治下の呉人の在り方の一例」(『岡山大学法文学部学術紀要』一〇、一九五八年、『初期の道教』創文社、一九九一年)が最も詳細であり、本稿はこれに依拠している。なお、楠山春樹「葛洪評伝」(『道家思想と道教』(平河出版社、一九九二年)、盧史「葛洪評伝」(『南京大学出版社』、二〇〇六年)も参照。
- 3 西晉の貴族制については、渡邊義浩「西晉「儒教国家」と貴族制」(汲古書院、二〇一〇年)を参照。
- 4 葛氏道については、福井康順「葛氏道の研究」(『東洋思想研究』五、一九五三年、『福井康順著作集』第二卷「道教思想研究」、法藏館、一九八七年に所収)、および小林正美「六朝道教史研究」(創文社、一九九〇年)を参照。また、葛洪の思想全般については、胡孚琛「魏晉神仙道教―『抱朴子内篇』研究」(台湾商務印書館、一九八九年)、任繼愈(主編)「葛洪与魏晉丹鼎道派」(『中国道教史』上海人民出版社、一九九〇年)などを参照。
- 5 太安中、石冰作亂。吳興太守顧祕、爲義軍都督、與周玘等起兵討之。祕檄洪爲將兵都尉。攻水別率、破之、遷伏波將軍。水平、洪不論功賞、徑至洛陽、欲搜求異書以廣其學(『晉書』卷七十二「葛洪傳」)。
- 6 「呉の四姓」については、大川富士夫「呉の四姓について」(『歴史における民衆と文化』国書刊行会、一九八二年、『六朝江南の豪族社会』雄山閣出版、一九八七年に所収)を参照。孫吳政權と「呉の四姓」との関係については、渡邊義浩「孫吳政權の展開」(『漢学会誌』三九、二〇〇〇年、『三国政權の構造と「名士」』汲古書院、二〇〇四年に所収)を参照。
- 7 渡邊義浩「西晉「儒教国家」の限界と八王の乱」(『東洋研究』一七四、二〇〇九年、『西晉「儒教国家」と貴族制』前掲に所収)。
- 8 陸機への中原貴族からの蔑視と、それへの反発の中で陸機が曹操の臨終を女々しく描いたことについては、渡邊義浩「陸機の君主観と「弔魏武帝文」」(『漢学会誌』四九、二〇一〇年、『西晉「儒教国家」と貴族制』前掲に所収)を参照。
- 9 渡邊義浩「陸機の「封建」論と貴族制」(『日本中国学会報』六二、二〇一〇年、『西晉「儒教国家」と貴族制』前掲に所収)。

『抱朴子』の歴史認識と王導の江東政策

- 10 嵇君道問二陸優劣。抱朴子曰、……陸平原作子書未成。吾門生、有在陸君軍中、常在左右。說、陸君臨亡曰、窮通時也。遭遇命也。古人貴立言以爲不朽。吾所作子書、未成。以此爲恨耳。余謂、仲長統作昌言、未竟而亡。後董襲撰次之。桓譚新論、未備而終。班固謂其成琴道。今才士何不贊成陸公子書（『太平御覽』卷六百二文部著作所引『抱朴子』）。
- 11 曹丕の文学論については、渡邊義浩「曹丕の『典論』と政治規範」（『三国志研究』四、二〇〇九年）、曹植のそれについては、渡邊義浩「経国と文章―建安における文学の自覚（一）」（『林田愼之助博士傘寿記念三国志論集』三国志学会、二〇一二年）を参照。
- 12 葛洪の文学論と曹丕・曹植、嵇康・陸機との関係については、渡邊義浩「葛洪の文学論と『道』への指向」（『東方宗教』一四、二〇一四年）を参照。
- 13 侯外廬（他）「葛洪内神仙外儒術的道教思想」（『中国思想通史』第二卷、生活・読書・新知三聯書店、一九五一年）は、『抱朴子』に現れた反中原思想を整理している。
- 14 村上嘉実「抱朴子外篇について」（『福井博士頌寿記念東洋思想論集』一九六〇年、『六朝思想史研究』平楽寺書店、一九七四年に所収）は、外篇における歴史観は、近代を古代に劣らぬものとなし、儒家的な君臣関係を謳歌し、社会及び文明の発達を認めてはいるが、要するにそれは本たる道家に対して、末たる儒家及びその他の諸子の特色を言ったものに過ぎない、としている。解正勳「由《抱朴子》看葛洪的社会历史观」（『巢湖学院学报』八一四、二〇〇六年）も参照。
- 15 大淵忍爾「抱朴子研究序説」（『岡山大学法文学部学術紀要』五、一九五六年、『初期の道教』前掲に改題のうえ所収）。
- 16 『論衡』齊世篇の内容、およびそれが「頌漢論」を構成する一部となっていることは、大久保隆郎「王充の頌漢論―齊世篇の考察」（『福島大学教育学部論集』人文科学部門五四、一九九三年、『王充思想の諸相』汲古書院、二〇一〇年に所収）を参照。
- 17 或曰、古之著書者、才大思深。……古書之多隱、未必昔人故欲難曉。或世異語變、或方言不同。經荒歷亂、埋藏積久、簡編朽絕、亡失者多。或雜續・殘缺、或脫去章句。是以難知、似若至深耳（『抱朴子』外篇卷三十鈞世篇）。

18 吉川忠夫「汲冢書発見前後」(『東方学報』(京都) 七一、一九九九年)は、『抱朴子』の佚文に、『汲冢中竹書』からの引用があることを指摘する。

19 且夫尚書者、政事之集也。然未若近代之優文・詔策・軍書・奏議之清富・瞻麗也。毛詩者、華彩之辭也。然不及上林・羽獵・二京・三都之汪濊・博富也。然則古之子書、能勝今之作者何也。……且夫古者、事事醇素、今則莫不彫飾。時移世改、理自然也。……世人皆知之快於襄矣。何以獨文章、不及古邪(『抱朴子』外篇卷三十鈞世篇)。

20 西晉の滅亡理由を問われた旧孫吳の臣下である吾彦は、天祿・曆數には限りがあり、「此れ蓋し天時なり。豈に人事ならんや(此蓋天時、豈人事也)」と答えている(『晉書』卷五十七吾彦傳)。これが西晉から期待された歴史認識であった。

21 吳之抄季、殊代同疾如前。失之於彼、不能改弦於此。……余師鄭君、具所親悉、每誨之云、吳之晚世、尤劇之病、賢者不用、滓穢充序、紀綱馳紊、吞舟多漏。貢舉以厚貨者在前、官人以黨強者爲右。……背公之俗彌劇、正直之道遂壞。於是、斥鷃因驚風以凌霄、朽舟託迅波而電邁、鸞鳳卷六翻於叢棘、鷁首滯潢汙而不權矣。秉維之佐・牧民之吏、非母后之親、則阿諂之人也。

……(『抱朴子』外篇卷三十四吳失篇)。

22 孫吳の滅亡については、渡邊義浩「孫吳政權の展開」(『漢学会誌』三九、一九九九年)、『三国政權の構造と「名士」前掲に所収を参照。

23 鄭君又稱、其師左先生、……告其門生曰、漢必寢耀、黃精載起、纒樞紐於太微、迴紫蓋於鴟首、聯天理物、光宅東夏、惠風被於區外、玄澤洽乎宇內、重譯接武、貢楛盈庭、蕩蕩・巍巍、格于上下、承平守文、因循甚易。而五弦謚響、南風不詠、……用者不賢、賢者不用也。……已矣、悲夫。我生不辰、弗先弗後、將見吳土之化爲晉域、南民之變成北隸也。言猶在耳、而孫氏

輿輓(『抱朴子』外篇卷三十四吳失篇)。

24 抱朴子聞之曰、二君之言、可爲來戒。故錄于篇。欲後代知有吳失國、匪降自天也。若苟諱國惡、織芥不貶、則董狐無貴於直筆、賈誼將受譏於過秦乎(『抱朴子』外篇卷三十四吳失篇)。



- 25 このほか、将来への提言としては、君主が優秀な臣下を豊富に集め、それぞれの才能に応じた適材適所の配置を行うべきことが、外篇卷十務正篇・卷十一貴賢篇で主張されている。
- 26 東晉の成立過程については、金民寿「東晉政權の成立過程」（『東洋史研究』四八一—二、一九八九年）を参照。
- 27 (王) 導因進計曰、古之王者、莫不賓禮故老、存問風俗、虛已傾心、以招俊乂。況天下喪亂、九州分裂、大業草創、急於得人者乎。顧榮・賀循、此土之望、未若引之以結人心。二子既至、則無不來矣。帝乃使導躬造循・榮二人、皆應命而至。由是吳・會風靡、百姓歸心焉。自此之後、漸相崇奉、君臣之禮始定（『晉書』卷六十五王導傳）。
- 28 現行の『抱朴子』が不揃いの理由は、外篇の一部が佚亡したこともある。武鋒『《抱朴子外篇》佚亡情況考弁』（『重慶社會科學』二〇〇六—八、二〇〇六年）を参照。また、敦煌より出土した外篇については、王卡「敦煌本《抱朴子殘卷》的伝世経緯」（『敦煌學輯刊』二〇一三—三、二〇一三年）を参照。
- 29 文貴豐贍。何必稱善如一口乎。不能拯風俗之流遯、世塗之凌夷、通疑者之路、賑貧者之乏。何異春華不爲耨耨之用、蒞蕙不救氷寒之急。古詩刺過失、故有益而貴。今詩純虛譽、故有損而賤也（『抱朴子』外篇卷四十辭義篇）。
- 30 上國衆事、所以勝江表者多。然亦有不可否者。君子行禮、不求變俗、謂違本邦之他國、不改其桑梓之法也（『抱朴子』外篇卷二十六譏惑篇）。
- 31 漢魏革命と魏晉革命の比較については、渡邊義浩「西晉における「儒教国家」の形成」（『漢學會誌』四七、二〇〇八年）、西晉「儒教国家」と貴族制『前掲』に所収）を参照。
- 32 正始二年、太僕陶丘一・永寧衛尉孟觀・侍中孫邕・中書侍郎王基、薦（管）寧曰、臣聞、龍鳳隱耀、應德而臻、明哲潛遁、俟時而動。是以鸞鷲鳴岐、周道隆興、四皓爲佐、漢帝用康。伏見、太中大夫管寧、應二儀之中和、總九德之純懿、含章素質、冰潔淵清、玄虛澹泊、與道逍遙。娛心黃老、游志六藝、升堂入室、究其闡粲。韜古今於胸懷、包道德之機要。中平之際、黃巾陸梁、華夏傾蕩、王綱弛頓。遂避時難、乘桴越海、羈旅遼東、三十餘年。在乾之姤、匿景藏光、嘉遁養浩、韜韞儒墨、潛化傍流、



暢于殊俗。黃初四年、高祖文皇帝、疇諮羣公、思求傳乂。故司徒華歆、舉寧應選、公車特徵、振翼遐裔、翻然來翔。……若繼二祖招賢故典、賓禮備邁、以廣緝熙、濟濟之化、侔于前代。……〔三國志〕卷十一 管寧傳。

33 もちろん、こうした外的原因のほかにも、葛洪が『抱朴子』を著した内的理由がある。それは、人として志を持ち、それを著述によって表現することで、葛洪の志は、すべての根源である「道」を体得することにより、内は身を修め、外は国を治められる神仙への到達方法を詳細に書き残すことであつた。これについては、渡邊義浩『抱朴子』の文学論と「道」への指向（前掲）を参照。

34 『晉書』卷七十二葛洪傳に、「元帝丞相と爲り、辟して掾と爲す。賊を平ぐの功を以て、爵關内侯を賜ふ（元帝爲丞相、辟爲掾。以平賊功、賜爵關内侯）」とある。また、『晉書』卷八十九忠義虞惲傳に、「元帝丞相と爲るや、四方の士を招延し、多く府の掾に辟す。時人之を百六掾と謂ふ。（虞）望なれば亦た召せらるるも、恥ぢて應ぜず（元帝爲丞相、招延四方之士、多辟府掾。時人謂之百六掾。（虞）望亦被召、恥而不應）」とある。

35 歴覽前載、逮乎近代、道微俗弊、莫劇漢末也（『抱朴子』外篇卷三十三 漢過篇）。

36 西晉の前半を生きた司馬彪が、漢を規範としての鑑と捉える『續漢書』を著し、古典中國の成立期としての後漢の重要性を今に伝えることは、対照的な後漢観である。渡邊義浩「司馬彪の修史」（『漢学会誌』四五、二〇〇六年、『西晉「儒教国家」と貴族制』前掲に所収）を参照。

37 一而漢之末葉、桓・靈之世、柄去帝室、政在姦臣。……故東園積賣官之錢、崔烈有銅臭之嗤。上爲下傲、君行臣甚。……中正・吏部、並爲魁儉、各責其估。清貧之士、何理有望哉（『抱朴子』外篇卷十五 審舉篇）。

38 葛洪の清談批判については、鍾盛・羅毅「從『抱朴子』看葛洪对玄学的批判」（『中華文化論壇』二〇〇八年、二〇〇八年）を参照。

39 持郷論者、則賣選舉以取謝、有威勢者、則解符疏以索財。或（有）〔受〕罪人之賂、或枉有理之家……（『抱朴子』外篇卷五

『抱朴子』の歴史認識と王導の江東政策

十自敘)。楊明照に從い、「有」を「受」に改める。

40 生乎世貴之門、居乎熱烈之勢、率多不與驕期、而驕自來矣。……若夫偉人・巨器、量逸韻遠、高蹈獨往、蕭然自得。……世人聞戴叔鸞・阮嗣宗傲俗・自放、見謂大度、而不量其材力非傲生之匹、而慕學之。或亂項科頭、或裸袒躡夷、或濯脚於稠衆、或溲便於人前、或停客而獨食、或行酒而止所親。此蓋左衽之所爲、非諸夏之快事也。……今世人無戴・阮之自然、而効其倨慢。〔抱朴子〕外篇卷二十七刺驕。なお、外篇卷四十六彈禰篇では、奇矯で知られる禰衡が、人から憎まれるような言動をしつつ、それに気づかなかつた者で、内心では出世したがっていた俗物と批判されている。

41 『太平御覽』卷五百九十九文部品量文章に、「抱朴子曰く、……陸君深く文士の放蕩・流通・遂往を疾み、虚誕の言を爲さず、能はざるに非ざるなり（抱朴子曰……陸君深疾文士放蕩・流通・遂往、不爲虚誕之言、非不能也）」とある。なお、西晉末期の放達については、李濟滄「兩晋交替期における放達の風氣について」（『東洋史苑』五四、一九九九年）、景蜀慧「西晋名教之治与放達之風」（『魏晋南北朝史論文集』齊魯書社、一九九一年）を参照。

42 章義和「正郭与彈禰——《抱朴子外篇》漢末名士評議」（『河南科技大学学报』社会科学版二二〇五年）は、後漢末に託して自己の理想を表明している、とする。韓紹深「淺論《抱朴子》之人才觀」（『宜春学院学报』三二〇一年）も参照。

43 吉川忠夫「抱朴子の世界（上）（下）」（『史林』四七一五、六、一九六四年）。また、「范曄と後漢末期」（『古代学』一三三—一四、一九六七年、『六朝精神史研究』同朋舎出版、一九八四年に所収）も参照。

44 故聖君莫不根心招賢、以舉才爲首務、施玉帛於丘園、馳翹車於巖藪、勞於求人、逸於用能、上自槐棘、降逮早隸、論道經國、莫不任職。恭己無爲、而治平刑措、而化洽無外、萬邦咸寧（『抱朴子』外篇卷十五審舉篇）。

45 今普天一統、九域同風、王制・政令、誠宜齊一。……昔吳土初附、其貢土見偃以不試。今太平已近四十年矣、猶復不試、所以使東南儒業衰於在昔也。此乃見同於左衽之類、非所以別之也。……今若遐邇一例、明考・課試、則必多負笈千里、以尋師友、

轉其禮賂之費、以買記籍者、不俟終日矣（『抱朴子』外篇卷十五 審舉篇）。

46 もちろん、人材の登用だけではなく、人事の配置も重要であることは、縣令の重要性を説く外篇卷二十八 百里篇で主張されている。

47 又秀・孝皆宜如舊試經答策、防其〔罪〕〔置〕對之姦。當令必絕其不中者勿署吏、加罰禁錮。其所舉、書不中者、刺史・太守免官。不中左遷、中者多、不中者少、後轉不得過故。若受賕而舉所不當、發覺有驗者除名、禁錮終身、不以赦令原、所舉與舉者同罪（『抱朴子』外篇卷十五 審舉篇）。楊明照に従い、「罪」を「置」に改める。

48 「舊」とは、曹魏の華歆が經學の衰退を鑑みて、孝廉の際に經典の試験を課すことを提案し、文帝曹丕がこれに従ったことを指す（『三國志』卷十三 華歆傳）。漢代の秀才（茂才）では、試験が課されなかったことについては、福井重雅『漢代官吏登用制度の研究』（創文社、一九八八年）を参照。

49 先是、以兵亂之後、務存慰悅、遠方秀・孝到、不策試、普皆除署。至是、（元）帝申明舊制、皆令試經。有不中科、刺史・太守免官。太興三年、秀・孝多不敢行、其有到者、並託疾。（『晉書』卷七十八 孔愉傳附孔坦傳）。

50 越智重明「晉南朝の秀才・孝廉」（『史淵』一・一六、一九七九年）。秀孝と本籍地との関係については、矢野主税「本貫地と土断、秀孝及び中正について」（『長崎大学教育学部社会科学論叢』二〇、一九七〇年）がある。

51 宮崎市定「九品官人法の研究―科挙前史」（『東洋史研究会』一九五六年）は、通常の秀才は、ほとんどが丙（宮崎が三等の成績を甲乙丙と命名）に及第とされ、郷品四品に相当する八品官より起家した、とする。甲で及第すると郷品二品であったが、きわめて稀な事例であった。

52 中国の貴族が文化を存立基盤とすることは、渡邊義浩「所有と文化―中国貴族制研究への一視角」（『中国―社会と文化』一八、二〇〇三年、『三國政權の構造と「名士」前掲に所収）を参照。



# Historical Perceptions in the Baopuzi and Wang Dao's Policy towards Jiangdong

by WATANABE Yoshihiro

Ge Hong 葛洪, who was born into a poor family in Jiangdong 江東, was such an ardent admirer of Lu Ji 陸機, who had not been blessed with good rulers and died a violent death during the Rebellion of the Eight Princes, that he sent one of his students to Lu Ji's encampment to inquire of his dying words. For this reason, following in the footsteps of Lu Ji's "Bianwang lun" 辯亡論, which described the fall of the Sun Wu 孫吳, Ge Hong discussed the fall of the Sun Wu in the "Wushi" 吳失 chapter of his *Baopuzi* 抱朴子.

When discussing the fall of the Sun Wu, Ge Hong's historical perceptions were premised on the notion that past and present are of equal value (*junshi* 鈞世). This was influenced by the "Qishi" 齊世 chapter in the *Lunheng* 論衡 by Wang Chong 王充, but whereas Wang Chong put forward the idea of the equality of the ages (*qishi*) in order to glorify the Han dynasty, Ge Hong's idea of *junshi* did not lead to praise of the Western Jin 晉.

Rather, there is reflected in the "Wushi" chapter a sense of crisis regarding the Western Jin, which was in a state of upheaval. What concerned Ge Hong the most was the *modus operandi* of rulers who did not make use of wise men, something that he also emphasized as the cause of the fall of the Sun Wu. Lu Ji's "Bianwang lun" similarly criticized the failure to employ men of wisdom, but he did so in order to satirize the foolishness of the emperor Huidi 惠帝 of the Western Jin. In contrast, Ge Hong's view in this regard reflected his perception of the times, which was premised on his proposals to the administration of Wang Dao 王導 and Sima Rui 司馬睿, who had heralded a policy towards Jiangdong that promised to respect local customs and recruit talented men.

In the *Baopuzi*, Ge Hong discussed critically in regard to respect for local

customs how the customs of Jiangdong had deteriorated as a result of rule by the Western Jin, and with regard to the recruitment of talented men he criticized on the basis of his historical perception of the final years of the Later Han the manner in which appointments were made in the late Western Jin. Like the late Western Jin, the final years of the Later Han were a time when the system for making official appointments had collapsed because of distortions in the assessment of nominees, and in the *Baopuzi* Ge Hong presented the administration of Wang Dao and Sima Rui with concrete proposals for reforming the system for making official appointments.

His proposal, based on a historical perception that viewed past and present as being of equal value, was one that did not discriminate between the Chinese heartland, inhabited by descendants of the victors, and Jiangdong, inhabited by descendants of a defeated state, and it included penal provisions for recommenders and aimed to employ men of the categories of “filial and incorrupt” (*xiaolian* 孝廉) and “cultivated talent” (*xiucai* 秀才) on the basis of examinations in Confucian learning. This was not a proposal that directly reformed the nine-rank rectifier system (*jiupin zhongzheng* 九品中正) that provided the institutional guarantee for turning out high-ranking officials in the Western Jin, and here one can discern the limitations and earnestness of Ge Hong, who came from a poor but influential local clan in Jiangdong.